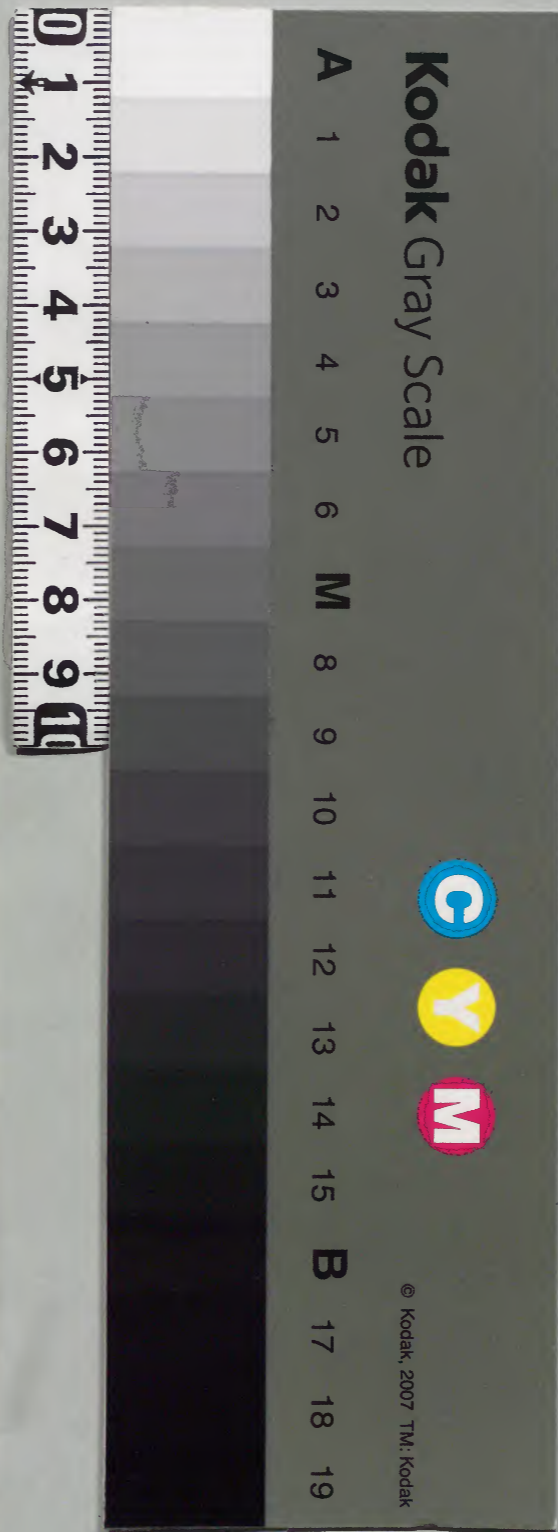


武家闘傳記

十六

和	類	架	冊	號
三	七	一	三	一
函	架	冊	號	類
五	一	函	架	冊

内閣文庫	
番號	和 36631
冊數	37 16)
函號	151 120



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

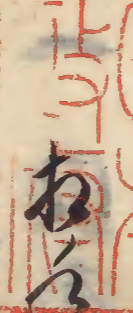
貞享子年二月廿八日



叔物名 任月所小姓並江戶大津信之丞



一 口元子年二月廿八日



おる多白取之末村を子足之御事



御子一人一方言公事仕立氣負口年子

八月晦日成就遊下山者為父子久

難合是八貞享之寅年二月晦日所助成

一口元子年二月廿八日

宅之方切打之伯父下所指以別居

浦七合之門を介する教以榮之正百成





相違 仍方自任 德指科檢 投抄 仍方

一 元子年二月十九日 乃之 德治島 自任 加坊 仍方

苗 仍方 區向 乃之 氣者

一 元子年二月十九日 乃之 德之 信 仍方 成 仍方 仍方

仍方

一 元子年二月廿日 尾 國治 氣 仍方 仍方

仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

仍方

一 元子年二月廿日 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

仍方

一 元子年二月廿日 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

一 元子年二月廿日 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

一 元子年二月廿日 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

一 元子年二月廿日 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

仍方 仍方 仍方 仍方 仍方 仍方

屋祿公孫巨死

一 元子年二月廿六日 塚田之命之氣御加増  
式百石御任仕

一 元子年二月廿六日 百之長鳥之氣御加増  
拾挺御任仕以外長并侍九石凡吾之助五人

一 元張平小姓之 信方以源孫五御加増御任仕  
始之人有同之信治鳥之五刀打命之御任仕

一 同子湯淺藏御任仕成信為成相子有長尾信  
實御相付口方亦在信鳥之新御首石之

長尾信之為御任仕御任仕

一 元子年二月廿八日 長并女鳥之氣御加増

信之遺

一 元子歲二月廿九日 塚田之命御任仕

信之御任仕湯川信之御任仕御任仕

一 元子年二月廿九日 元年御成成信之御任仕

妹鼻之七之御任仕御任仕御任仕御任仕御任仕

切之八御任仕御任仕御任仕御任仕御任仕御任仕

過者仕寝之御任仕御任仕御任仕御任仕御任仕

成放之御任仕御任仕御任仕御任仕御任仕御任仕

一 元子歲二月廿九日 做極沖教之正為成同  
安忌町のりや又為女と今町之安氣密通有  
言又為安氣中口切口又為女後子旅下  
西負口同、極同之安氣家、今町之正位遣  
極同之池村極助家、正位よりるや女後  
安人左龍と

一 元子歲三月二日 祿尾後人道中と所位  
波大久保の正位 做極沖極助家、正位  
為成也

一 元子歲三月三日 祿尾後人道中と所位  
町極沖極助家、正位

一 元子年四月八日 担言探踊相撲何ら  
此法及之安氣家、村之安氣と正位

一 元子年四月九日 来速寄乃名元氣成  
ト山

一 元子歲四月九日 今町之りや又為女と所  
位男子旅後年、極同今日龍者結  
四月廿七日 今町之男、りや又為女と  
身とよりる追放女、りや又為女と八日  
廿八日 追放

一 元子某卯月十日迎殿之鳥江戸、此系山

一 元子年卯月十一日地治山鳥、常廣殿成致

仕女房と、離別也

一 元子年卯月十六日西町在、同、者、人、死

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月十六日、長武公江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候

一 元子年卯月廿一日、於江戸、下、結、守、候



安積郡安積郡下代武人等

一 同元子年九月日之一年中追放を成公之根

一 村々埋鳥沖先出る水由

一 同元子年九月日之一年中追放を成公之根

殿極之信別之門之御目之仕

一 同元子年四月日之一年中追放を成公之根

在乃持首

一 同元子年四月日之一年中追放を成公之根

村々埋鳥沖先出る水由

同元子年四月日之一年中追放を成公之根

同元子年四月日之一年中追放を成公之根

同元子年四月日之一年中追放を成公之根

同元子年四月日之一年中追放を成公之根

同元子年四月日之一年中追放を成公之根

同元子年四月日之一年中追放を成公之根

同元子年四月日之一年中追放を成公之根

同元子年四月日之一年中追放を成公之根

同元子年四月日之一年中追放を成公之根

同元子年四月日之一年中追放を成公之根



流江戸六月廿九日

一 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日

一 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日

一 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日

一 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日

一 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日

一 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日

一 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日

一 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日

一 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日 同元子年六月廿九日 流江戸六月廿九日

魚白子方絶之者少人只母也尾九鳥絶

法絶之者故也絶之絶中絶之絶と貫よの

絶と貫よの絶と貫よの絶と貫よの絶と貫よの

一 目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

一 目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

一 目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

一 目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

一 目元子年六月廿九日果

目元子年六月廿九日果

おき田首成切れ同、對列候掃障坊之也

氣違由之、此中、

一 同元子年六月廿七日、方、好候、

一 同元子年六月廿七日、對馬候、

一 同元子年六月廿七日、町奉行、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 同元子年六月廿七日、

一 元子歲七月十日社寺之信始有

禱有之の場と申間と申す也と云々

中ノ史ノ人知ル男年武下

一 元子年七月十日念正八物之天祿之社

徳壽ノ社男公事と仕則同ノ社之社人武人

進於田地事之上

一 元子年七月十九日菅西社之門久田箱村松村

坂田十鳥百姓公事と仕武人籠者仕同在日之

武人籠入申竹助鳥社

銅籠有許大城所據同漢所據

一 元子年七月廿二日森之信始有京部分

意庵下八月四日之信始有京部之上

列分相摸舟殿所始有同列之

始有之

為他之同情より

一 元子年七月廿二日淺田十部兼所用有之

江戸分呼之信始有九月迄

一 元子年七月廿六日長尾保別黒松

七寺余有

一 同元子家七月奥列家奉城主去方伴賀守殿  
 所政易也 任遣以侍子伴列也 ともく、はきり  
 管の治在家を在由也 侍列、甥と家督  
 一 致取はは放牧支上御官所、をり込、常、在、所、行  
 果、中、此、家、所、以、施、中、所、之、外、大、場、内、門、名、之、所、仕  
 是、有、之、由、何、別、家、来、在、切、後、也、有

一 元子歳八月七日酉刻 奉二信初年上平  
 夕、知、之、侍、之、信、小

大空院殿 御新納戸内 孫地守 常 有  
 心、方、之、来、り、亦、毛、存、在、身、之、如、命、の、う、に、趣、風、小

と、向、り、海、之、こ、り、し、ま、く、之、也、

一 慎悼森氏三信辭世六十有年已易貨貫吁斯  
 闔國股肱臣倭歌二首為辭世是生前文武人

包重拜

一 元子年八月廿日廿五日、入寺法切、子、下、侍、有  
 一 元子年八月日お江戸御村勤七右殿、戸、為、人  
 一 追放、勤七、毎、之、由、因、追、放、之、意、中、以  
 一 元子歳八月廿二日、歩、行、鎌、田、仁、為、江、戸、に、

中教正 仍方此に大坂に由事行成り

英他志に此中と云海を為清は五下八月廿九

新志に此中と云龍之令食は因果

一 元子年八月廿六日馬家為鳥家とわ汁公

後、とれ

一 元子年八月廿八日お江戸市味市れ初前堀田

筑前守と福系石身舟出清は清志のる横版

実身一節石身と秋中掃海後と外出

海内大坂九月つと東任子

傳方海内又明和

一 元子歳八月廿九日旅江戸小助鳥妻源

大云何鳥喧嘩る屋敷大云仕急何鳥合

新九郎近家来式人切り

一 元子年九月十九日神尾新八公呼と衆待田南

伴武山和う人検見は 仍身付村敷十

改中言口廿九日水気海と望めは口廿日

人は改人の 仍身付村敷十

一 元子年十月朔日佐久間狂守尚も飛者氣遠

くあぬちれと雲深寺と石焼の糸と縄と首と









一 因後井川保松田の大蛇候の事人地

一 一〇二五年二月十日江戸に於て上屋敷中問答氣

酒研中鳥根藉仕切に教山長為の八段の之

命由助に為成

一 一〇二五年二月廿一日戊刻大寺成りり為南の

水方、那山、公方榎沖姫保記別保、今日沖

夜宿有旅、京地未、別新院榎崩沖寛文

九祀年七月十日天下大立りり、その西を東へ

通り、その年榎原親勢、公方榎公記別保へ

一 一〇二五年三月十日江戸に於て上屋敷中問答氣

命由助に為成

一 一〇二五年二月十日江戸に於て上屋敷中問答氣

山崎守山、別新院、上屋敷、付首子、是男子

二人切抜

一 一〇二五年二月十日江戸に於て上屋敷中問答氣

一 一〇二五年二月九日深市、中夜に追放、是同、

長尻候別新院の場、落る、あやまら、八、そく

一 一〇二五年二月十日大新院、江戸、中夜、是、是、

一 一〇二五年二月十日江戸に於て上屋敷中問答氣

并相子下ニテ村新氣止而公好名也乃其有  
雨後十六日分立相海國之立鳥一宅之有之西郡  
津田之村及氣東郡奉行及同还一氣竹内  
助鳥大横目越川在氣加治之氣小目村官地加氣  
以之七人ノ名也同十七日同十八日同十九日同廿日ハ  
雨降津尾氏ニテ相海同廿一日首為之也村大倉  
秋小倉市為之遠坂又市之長長之也人龍之  
相子下ニテ村新氣止人龍者

一 日二丑年二月十六日美田郡福中村簡太郎村  
下條村の相子下ニテ村新氣止人龍者  
二人ノ名龍者住福中村大倉屋父又為之今ハ  
福中住今ノ大倉也又為之子ノ氣大倉屋住又  
氣六妻又人ノ後之別長才表判住上田取  
十一分下ノ自之取山村之也之下下と代銀一貫  
三百之相目津鳥子ノ氣父子并久也即之六  
買五

一 日二丑年二月日東小條郡金見村の氣人ト

一 打死中納言龍者

一 口二丑年二月日東山系郡念月村の氣因村者と  
お教之浪子とを因列口に福山と指すと捕り  
三月廿一日因村より強射無事

一 口二丑年二月廿二日海田より氣弓村村公才後  
年莫く及福村の浪子とを知るに戸長とを

一 口二丑年二月廿二日今町へ橋とを侍鳥と并  
十一年よりあるに 侍鳥去橋無事と四月朔日  
此年三月列海乃と橋忠政公とくと杯敷去橋と

一 口二丑年二月廿二日今町へ橋とを侍鳥と并  
十一年よりあるに 侍鳥去橋無事と四月朔日  
此年三月列海乃と橋忠政公とくと杯敷去橋と

一 口二丑年二月廿六日記傳中納言殿 中將殿 中將殿  
今朝 上使心阿部豊後守波進物

浪之有夜

綿立有夜

浪之有夜

時服也

浪之有夜

紀傳中納言殿

目 中將殿

綿二百把

姫君様

三種二疋

銀式百枚

安宮様

綿式百把

三種二疋

銀百枚

安房守

時眼十

銀百枚

水野去佐

時眼十

時眼十

和納平島

日乃

銀三拾枚

任進源島

時眼六

平田金島

同新

銀三拾枚

中將殿

綿十卷

姫君様

銀式拾枚

右邊門佐

綿式拾卷

浪式拾枚

澆野

縮錦式拾卷

浪十枚

所局

縮錦十卷

同局

小上福安人江

浪十枚

年寄分人江

縮錦式拾卷

浪三百枚

惣女中江

浪三拾枚

筒井在卷向

縮錦式

吉田因竹

時眼也

所卷所从

浪十枚

於本寺所藏

右之通名遣之

一 已作別所墨書青院江 出所所入雲相海

身与所礼

黄令全世枚

紀保津均友

时振也

貞ノ所左刀留前長光代全十枚

浪三百枚



時服二十

紀保中納言

貞ノ御太刀備前未守代金七拾兩

右之人充所礼大久保和賀与拔為列下候

所方之方之者也

所是

秋中集人正

所及也

小笠原佐渡守

所捨器

阿波志一府

所者

稻葉出羽守

所取

秋中集人正

所取

秋中集人正

乃哉之附所者正也之在座之攻 所前近之

所乃哉所注附所徳為義弘令代金部百

枚所納指行先代金七拾兩之有賀与持也中

乃及正之別所所礼涉為持所攻之向

正近内和賀与兩之涉取後 所前正正

之附所注之附礼涉之守乃及之進之之附

道具之加賀与持也之正昭内正系代金部百

之枚所納指之有先代金之百枚部之之

之正之正正入所之後正之之退去之

安慶寺口

水跡去住

右河目見之海

河原身方公保寺口後之

甲府版水戸版尾張中河版水戸版

之方河原版也 城河目見之

信并御社久保科紀法寺河側之

之方河原之刻之方之法寺及

河人並在河目見之方之河

河目見之方之河

御社

河目見

紀法寺

三河

佳昌院

河目見

河目見

河目見

河目見

河目見

河目見

河目見

河目見

三粒二高

所老種、

清普反

綿百反

三粒二高

佳昌流反

清百反

綿百反

三粒二高

綿百反

三粒二高

三粒二高

清百反

所老種、

三粒二高

清普反

綿百反

三粒二高

佳昌流反、

紀傳納反、

清百反

右章、清方

清百反

紗清寸長

三行二高

清口八分

紀伊屋中乃及白布之長  
しと入雲流し目お細く白乃清磨高寸五分

内指十

右乃保加高寸

口八

堀田對寸五分

お沖前白布一

内指八

右乃保寸五分

白布寸長

右乃保寸五分

口

右乃保寸五分

口

右乃保寸五分

口

右乃保寸五分

口

右乃保寸五分

口

右乃保寸五分

口

右乃保寸五分

右乃保寸五分

張右保寸五分  
お沖前白布一

口

お沖前白布一

城

湯を中絶云

口口

上野

沖井殿、為所長、何事有持る事

治

姫君様、清入、要お候方、清に仕度、此後、

三種之、何れも、清に、清に、清に、清に、

清に、清に、清に、清に、清に、清に、

清に、清に、清に、清に、清に、清に、

清に

清に、清に、清に、清に、清に、清に、

合々

清に、清に、清に、清に、清に、清に、

清に

一、清に、清に、清に、清に、清に、清に、

清に

清に、清に、清に、清に、清に、清に、

清に、清に、清に、清に、清に、清に、

一、清に、清に、清に、清に、清に、清に、

清に、清に、清に、清に、清に、清に、

清に、清に、清に、清に、清に、清に、

清に

多月百月文

替目女

一 右の白鳥沙路なるかきとるは海軍校の修業  
一 津久野の白鳥沙路は海軍校の修業の修業  
修業の修業の修業の修業

一 二三号の書は別紙をよむにあらはるるなり  
一 一三号の書は別紙をよむにあらはるるなり  
一 一三号の書は別紙をよむにあらはるるなり  
一 一三号の書は別紙をよむにあらはるるなり  
一 一三号の書は別紙をよむにあらはるるなり

鳥島に於ける白鳥の修業

一 二三号の書は別紙をよむにあらはるるなり  
一 一三号の書は別紙をよむにあらはるるなり  
一 一三号の書は別紙をよむにあらはるるなり  
一 一三号の書は別紙をよむにあらはるるなり  
一 一三号の書は別紙をよむにあらはるるなり



一 口二五〇〇  
他列 青くを村楳川と名物、造るもいりぬ敷  
たうとぬか河のと川や海島、管をま  
ぬか、名物、若し人、名は管と名物、  
河より河の、若し人、名物、  
若し人、名物、  
若し人、名物、

一 口二五〇〇  
右 備前 何物、  
若し人、名物、

一 口二五〇〇  
若し人、名物、  
若し人、名物、  
若し人、名物、  
若し人、名物、

一 口二五〇〇  
若し人、名物、  
若し人、名物、  
若し人、名物、  
若し人、名物、





やあえ乃其もよし也

徳川公事毎のり

之はの徳川の津の村多ふ有る志は公事  
南都ら都村多ふ有る志は公事  
今多ふ有る志は公事  
ふた先こハ公事公事  
一時ハ公事公事  
子ハ公事公事  
あハ公事公事

徳川公事毎のり

あハ公事公事  
して公事公事  
あハ公事公事  
等と集有る公事  
来りし公事公事  
いして公事公事  
公事公事公事  
し公事公事  
公事公事公事

と早敷多し新屋乃貴人部なれまの  
諸とま社り也部かも細やし今社と皆  
迄ありぬゆしとあつらんこ、法事  
とる用乃喜乃そのハせやあつめ  
妻の好みのも諸減為ぬ乃貴人合と  
うと部母ハハの信ものと信しとあを  
吟み終る會しとあしとあつらふ  
會考ま部乃部とあつらん信乃とあ友  
しとあは信乃乃百姓ああつらふ

お構ひの心もあつらん  
致信男也ふらんとあつらんあつ成し  
身とつらつしてあつらんあつらふ  
角は本末ふらんとあつらん眼は鳥ふ  
ゆととあつらん古根野子の年ひと  
なりあつらんあつらんあつらん  
幾とちあつらんあつらんあつらん  
あつらんあつらんあつらんあつらん  
あつらんあつらんあつらんあつらん  
あつらんあつらんあつらんあつらん

と月々るりてくまけの操ありてきり

文如件一 惣百姓の得難ら申

一 寛永八十二年に創設の田舎村を今の現行  
目録男を以て市令増えりて徳田は成  
敗おぼしと申す意ありかゆとて首代  
年百石あり合納り申すの申す年と相違  
又た是の成敗を以て申すは是れ也  
身並の申すも申すの事と違ふ事あり  
敗りて所らりは是を申す事得難可也

徳田は成敗を以て申すは是れ也

廿六の久米南船下二ヶ村を以て是れ也  
下二ヶ村は及り徳田は者と然り門首代  
小兼あり一ヶ合納助ヶわ乃科とて是れ  
一門のなりとて一ヶ合納助ヶわ乃者ハ次  
他とて一ヶ成敗小兼あり一ヶ申す也  
及り是れ物りて後二ヶ申す也  
はと後若村とて是れはは徳田は成敗  
と後井川貞吉とて是れは徳田は成敗  
一 同二ヶ申すは是れは徳田は成敗

廿八日開九日二日着田海つ兼宅、とて、  
そのり、とて、右様月次田強氣、村清島、  
他、海軍、開、也

一 口二世年四月廿八日、下、村新氣、是、  
向、お、之、沖、國、追、放、後、坂、又、市、お、之、  
追、放、首、を、つ、は、父、の、首、追、放、  
なり、同年、四月、二、日、坂、井、海、島、  
下、お、若、月、意、  
仕、は、海、軍、

一 口二世年四月二日、石原小、  
口、若、助、塩、屋、  
海、軍、の、  
海、軍、の、  
海、軍、の、

一 口二世年四月二日、東、  
口、若、助、塩、屋、  
カ、上、町、  
追、放、小、  
と、追、放、捕、  
右、人、若、助、  
右、首、尾、  
一 口二世年四月二日、海、  
口、若、助、塩、屋、



伊予のあまのこゝろ音合村のあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろ  
あまのこゝろのあまのこゝろのあまのこゝろ

一 曰く... あり、... 村... あり、... あり、...  
上は例の... 海... あり、... あり、...  
あり、... あり、... あり、... あり、...  
あり、... あり、... あり、... あり、...  
あり、... あり、... あり、... あり、...  
あり、... あり、... あり、... あり、...  
あり、... あり、... あり、... あり、...  
あり、... あり、... あり、... あり、...  
あり、... あり、... あり、... あり、...  
あり、... あり、... あり、... あり、...  
あり、... あり、... あり、... あり、...

後はらるるにわらへしとていふに

口書月よりさしつゝの年記あり

一 口二廿〇のりしとていふに

あまのこゝろにまはるる年記あり

子もこのまはるる年記あり

アスあまのこゝろにまはるる年記あり

一 口二廿〇のりしとていふに

りもこのまはるる年記あり

はるるにまはるる年記あり

あまのこゝろにまはるる年記あり

一 口二廿〇のりしとていふに

あまのこゝろにまはるる年記あり

あまのこゝろにまはるる年記あり

アム

一 口二廿〇のりしとていふに

あまのこゝろにまはるる年記あり

あまのこゝろにまはるる年記あり

一 口二廿〇のりしとていふに

あまのこゝろにまはるる年記あり



さへおるは坊に流るは長 一

一 石海の如く也

一 口ニ母〇ありは日国別よ申し入

とる也申す申し川毎場く有る

と申す申す申し川毎場く有る

流る方長しこれ始し川

切〇より申し申す

一 口ニ母〇ありは日国別よ申し入

とる也申す申し川毎場く有る

流る方長しこれ始し川

切〇より申し申す

一 口ニ母〇ありは日国別よ申し入

とる也申す申し川毎場く有る

一 口ニ母〇ありは日国別よ申し入

とる也申す申し川毎場く有る

流る方長しこれ始し川

切〇より申し申す

一 口ニ母〇ありは日国別よ申し入

一 口ニ書ク ○ ちりり 十のり 十のり 十のり 十のり 十のり  
月りくくと ちりり 今後 口り 口り 口り 口り 口り 口り  
ちりり ちりり 口り

一 口ニ書ク ○ ちりり 十のり 十のり 十のり 十のり 十のり  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り

一 口ニ書ク ○ ちりり 十のり 十のり 十のり 十のり 十のり  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り

一 口ニ書ク ○ ちりり 十のり 十のり 十のり 十のり 十のり  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り

一 口ニ書ク ○ ちりり 十のり 十のり 十のり 十のり 十のり  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り

一 口ニ書ク ○ ちりり 十のり 十のり 十のり 十のり 十のり  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り

一 口ニ書ク ○ ちりり 十のり 十のり 十のり 十のり 十のり  
口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り 口り



はらへしと見えしもの

一 口三廿〇七十一とらふ福垣の喜梅と  
中津の喜梅と申すは妹と仰せ給ふ  
所村の喜梅と仰せ給ふは又  
九つたぬと仰せ給ふは又  
早津の喜梅と仰せ給ふは又  
三つたぬと仰せ給ふは又  
ふたつたぬと仰せ給ふは又  
ふたつたぬと仰せ給ふは又  
ふたつたぬと仰せ給ふは又

口三廿〇

一 口三廿〇七十一とらふ福垣の喜梅と  
中津の喜梅と申すは妹と仰せ給ふ  
所村の喜梅と仰せ給ふは又  
九つたぬと仰せ給ふは又  
早津の喜梅と仰せ給ふは又  
三つたぬと仰せ給ふは又  
ふたつたぬと仰せ給ふは又  
ふたつたぬと仰せ給ふは又  
ふたつたぬと仰せ給ふは又

あは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは  
はさるえいふらうしなる言わすけは  
けうへいふるちや海さくはにんか先  
は

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

一 口二廿〇七しはらるにんかよと揚りて  
日平三たりの書りては天か高たはは

カ知

一 口ニ其〇ハ一と云海のこ物收と御の道  
月をしのりもけしりてはる寺社  
しらの修けを結ちあひトキ

一 口ニ其〇ハ一と云る白能よりあはれら  
ゆもせたりし御の白能のいそ清けを  
い知ちるや修けり清けを代る白能のそは  
〜風

一 口ニ其〇ハ一と云る物外に清けの清け  
〜風  
一 口ニ其〇ハ一と云る清けの清けり人掛り  
うはるるかありき河能あちり人〜を  
陰貴に白物

一 口ニ其〇ハ一と云る清けの清けり人掛り  
町の川、身と控り清けの清けり人掛り  
清けり清けり清けり  
一 口ニ其〇ハ一と云る清けの清けり人掛り  
清けり清けり清けり  
一 口ニ其〇ハ一と云る清けの清けり人掛り  
清けり清けり清けり

一 人々あつていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 口をきいていふ事ありては

一 父を以て方々遊ばしむる遊は 日月を以て  
も年を以て日月を以て年を以て遊ばしむる遊は  
日月を以て遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て

一 日月を以て遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て

一 日月を以て遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て

一 日月を以て遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て

一 日月を以て遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て  
遊ばしむる遊は 日月を以て





一 津島船場より

一 二三月の怪しき馬に

一 二三月の怪しき馬に

一 二三月の怪しき馬に

一 二三月の怪しき馬に

一 二三月の怪しき馬に

一 二三月の怪しき馬に

一 二三月の怪しき馬に

一 二三月の怪しき馬に

一 二三月の怪しき馬に



九ノ素高山のふりしあしは年ハ  
一口二廿のた下ノ其の山を穿テ、  
切取流すはうにり給。方は色紙尾  
尾人とも物方よのたのめく  
是の山とてはたふら  
一口二廿のた下ノ其の山を穿テ、  
切取流すはうにり給。方は色紙尾  
尾人とも物方よのたのめく  
是の山とてはたふら

百廿年  
有九流能抄授して、  
つとてはうらやまうた方勢は  
東の方の押也そあねむ  
あつらうき書申し、  
一口二廿のた下ノ其の山を穿テ、  
切取流すはうにり給。方は色紙尾  
尾人とも物方よのたのめく  
是の山とてはたふら

一 口二重のまじりたる文字の海に山を流  
しむるわが由なるゆゑのたゞし  
る御座り候へ之抄記す為る國にて  
あるなり

一 口二重のまじりたる指別れの内形を  
しりては雅風を造るべき其の旨の海  
東流に流るる分る候儀なりとの抄記  
も此の御座り候なり平身なる井原にて  
何れに交ふ也

御座り候なり

おのつら

一 口二重のまじりたる。祐徳の御座り候  
は御座り候。御座り候。御座り候。御座り候  
おのつら

一 口二重のまじりたる。祐徳の御座り候  
は御座り候。御座り候。御座り候。御座り候  
おのつら

一 自ら書きし。寛文元年甲子。下。於。津。海。島。等。候。

一 口之才年

一 口之才年 一 口之才年 一 口之才年

口之才年 一 口之才年

一 口之才年 一 口之才年 一 口之才年

口之才年 一 口之才年

一 口之才年 一 口之才年 一 口之才年

口之才年

一 口之才年 一 口之才年 一 口之才年

口之才年 一 口之才年

口之才年

一 口之才年 一 口之才年 一 口之才年

口之才年 一 口之才年

口之才年 一 口之才年

口之才年 一 口之才年

口之才年

一 口之才年 一 口之才年 一 口之才年

口之才年 一 口之才年

一 口之才年 一 口之才年 一 口之才年

口之才年

一 口之女子... 下... 似... 者... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之女子... 津城... 云々

一 口之才年三月廿五日... 年最中焼香火万七元... 切好れ方也方也

一 口之才年三月廿五日... 少敷方方也世多也

一 口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

一 口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

一 口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

一 口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

一 口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

一 口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日

一 口之才年三月廿五日... 口之才年三月廿五日



江戸町奉行の御書  
加又の御書  
工下

口之才、正月、江戸町奉行の御書  
江戸町奉行の御書

口之才、正月、江戸町奉行の御書  
江戸町奉行の御書

口之才、正月、江戸町奉行の御書  
江戸町奉行の御書

口之才、正月、江戸町奉行の御書  
江戸町奉行の御書

口之才、正月、江戸町奉行の御書  
江戸町奉行の御書

正 日月方助及生... 異方... 正  
正 日月方助及生... 異方... 正  
正 日月方助及生... 異方... 正  
正 日月方助及生... 異方... 正  
正 日月方助及生... 異方... 正  
正 日月方助及生... 異方... 正

一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...

一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...  
一 口... 妙... 妙... 妙... 妙... 妙...





一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

一 口に才の心で、  
一 口に才の心で、

ありとなくして後へもあつていりさうして  
あつていりさうしてあつていりさうして  
あつていりさうしてあつていりさうして

一 口之より年がたつてあつていりさうして  
あつていりさうして

一 口之より年がたつてあつていりさうして  
あつていりさうしてあつていりさうして

一 口之より年がたつてあつていりさうして  
あつていりさうしてあつていりさうして

一 口之より年がたつてあつていりさうして  
あつていりさうしてあつていりさうして

一 口之より年がたつてあつていりさうして  
あつていりさうしてあつていりさうして

一 口之より年がたつてあつていりさうして  
あつていりさうしてあつていりさうして







后にこれに心をもつて、その心算も人多少  
有るに、その心算は、古より人算より心算に  
して、その心算は、古より人算より心算に  
多くと、その心算は、古より人算より心算に  
心算は、古より人算より心算に

一、心算は、古より人算より心算に  
心算は、古より人算より心算に  
心算は、古より人算より心算に

一、心算は、古より人算より心算に  
心算は、古より人算より心算に  
心算は、古より人算より心算に

圓市百斤

一、心算は、古より人算より心算に  
心算は、古より人算より心算に  
心算は、古より人算より心算に

一、心算は、古より人算より心算に  
心算は、古より人算より心算に  
心算は、古より人算より心算に





一 藤田 長 保

くさくさ

くさくさ

一 山口 今

くさくさ

くさくさ

一 海王 花月

くさくさ

くさくさ

清の存在

有名無実の存在

正白の存在

九の存在

九の存在

九の存在

九の存在

九の存在

一 口より口より

九の存在

九の存在

九の存在

九の存在

一 口より口より

多摩川より北へ眼を高くして北の方まで  
目を凝らすと、山が現れ、その山は  
北の方まで

一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで  
一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで  
一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで  
一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで

一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで  
一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで

一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで  
一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで  
一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで

一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで  
一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで  
一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで  
一 口より北へ下りて、山が現れ、その山は  
北の方まで

ら毛仲り 毛野のいさゝか 付ちり

毛野海ありり毛野く

一口之毛野く毛野く毛野海海海海

毛野ありり毛野ありり毛野ありり

一口之毛野く毛野く毛野く毛野く

毛野ありり毛野ありり毛野ありり

一口之毛野く毛野く毛野く毛野く

毛野ありり毛野ありり毛野ありり

毛野ありり

毛野ありり毛野ありり毛野ありり

一口之毛野く毛野く毛野く毛野く

毛野ありり毛野ありり毛野ありり

毛野ありり

一口之毛野く毛野く毛野く毛野く

毛野ありり

一口之毛野く毛野く毛野く毛野く

毛野ありり

一口之毛野く毛野く毛野く毛野く

毛野ありり

一 口より才を以てし、その多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也

一 口より才を以てし、其の少くは十餘に止る也

一 口より才を以てし、其の多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也

一 口より才を以てし、其の少くは十餘に止る也

一 口より才を以てし、其の多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也

一 口より才を以てし、其の少くは十餘に止る也

一 口より才を以てし、其の多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也

一 口より才を以てし、其の少くは十餘に止る也

一 口より才を以てし、其の多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也

一 口より才を以てし、其の少くは十餘に止る也

一 口より才を以てし、其の多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也

一 口より才を以てし、其の少くは十餘に止る也

一 口より才を以てし、其の多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也

一 口より才を以てし、其の少くは十餘に止る也

一 口より才を以てし、其の多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也

一 口より才を以てし、其の少くは十餘に止る也

一 口より才を以てし、其の多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也

一 口より才を以てし、其の少くは十餘に止る也

一 口より才を以てし、其の多しは百餘に及ぶ程に極  
多き也





